

創造



No.
44

創造 No.44

●平成17年度「とやま賞」贈呈式.....	3
●今年度の受賞者.....	4
●「夢の卵」育成事業.....	6
●きらめき未来塾.....	8
●仕事場拝見事業 「ダ・ヴィンチ入門教室」開催.....	9
●我が社の人づくり.....	10
●とやま賞募集 賛助会員の募集.....	11



「とやま賞」

「とやま賞」は、富山県の置県百年を記念して、富山県の将来を担う人づくりを目指して昭和59年に創設されました。受賞対象者は、富山県出身者又は富山県内在住者とし、学術研究、発明発見、芸術文化及びスポーツの分野において、顕著な業績を挙げ、かつ、将来の活躍が期待される個人又は団体に対して、賞状、奨励金を贈呈して、その活動を奨励するものです。

今年度の贈呈式及び記念講演会は、平成17年5月24日(火)富山国際会議場メインホールで行われました。受賞者のあいさつでは、研究を始めた経緯、研究の楽しさや苦勞、今後の抱負等が語られ、約250名の高校生をはじめ来場者は興味深く聴き入っていました。

また、記念講演会では、森重文氏(京都大学数理解析研究所教授)が、「数学まなびはじめ」と題し、数学の楽しさについて、自身の経験や例題の解説をまじえて講演されました。「見方を少し変えるだけで、難題が簡単に見える瞬間がある。これを一度体験するとやみつきになる。」と話され、集まった高校生らに数学の魅力が伝えられました。

講演する森氏



熱心にメモをとる学生達





東京大学
大学院薬学系研究科 助教授
川原 茂敬 氏

この度は名誉ある「とやま賞」をいただき、とても光栄に思い感謝いたします。私は現在、薬学部で研究をしています。薬学部を選んだのは、おそらく、幼少時の家の光葉業が影響しているのだろうと思います。

入ってみると薬学部はとてユニークなところで、優秀な薬剤師とともに薬学研究者を育てています。薬学という分野は生物、物理、化学などの幅広い学問領域を含んでいて、例えば、薬を合成するために化学の知識や技術が必要で、また、薬というのは生体システムと相互作用してその効果を発揮しますから、体に関する深い知識や技術が必要です。したがって、幅広い知識と能力が研究者に

求められ、薬学部は総合生命科学部としてこの様相を呈しています。

私自身は、物理系講座に属しながら学習や記憶などの脳機能の研究をしています。DNAなどの分子レベルから行動レベルまでの幅広い

い附帯にわたって総合的に研究することが求められます。脳研究に関わる学問には、生理学、心理学、そして物理学があります。これらはすべて「理」(ことわり)、すなわち、法則性を追求する学問です。一方で、脳を理解するためには分子レベルがいじれることも重要で、様々な作用を持つ薬が必要になります。つまり、ここでは、薬は病気を治すために直接役立つというよりは、薬が働く相手である生体のメカニズムを調べるためのツールとして役立っており、そのことは長い目でみれば病気のメカニズムの解明と新しい薬の開発へとつながります。

このように、私が属する研究分野一つをとっても、様々な学問領域が密接に絡み合い、重要な役割を果たしています。今後、長寿社会を迎えて薬学はますます重要になると思います。私自身も、今回の受賞にふさわしいように努力していきたいと思っております。

学術研究 (神経内科学)



金沢大学医学部附属病院
神経内科 医員
小野賢二郎 氏

この度は名誉ある「とやま賞」をいただくことができ、富山県ひとづくり財団の関係者の皆様に感謝いたします。私は、出生後まもなくして乳児下痢症のため危篤状態に陥りましたが、両親や主治医の懸命な努力により九死に一生を得ることが出来ました。そのため、高校生の頃から小児科医になりたいと思い、医学部に入学しました。ところが、六年後の医学部卒業時には、高齢化社会で痴呆や介護が

大きな社会問題となり、また、二十一世紀は脳の時代といわれるようになったため、神経内科を選択し、特にアルツハイマー病(A.D.)の研究に着手しました。

A.D.は、現在のところ、根本的治療法がなく、我々はその原因物質とされるβアミロイド蛋白(Aβ)が沈着していく過程を観察する試験管内基本モデルを確立し、Aβの沈着を抑制、あるいは既に沈着されたAβを分解する物質の探索を始めました。様々な疫学的研究をヒントに、ワイン関連ポリフェノール類などが非常に低い濃度でAβ沈着を抑制するだけでなく、既に沈着されたAβをも分解し、分解されることにより毒性も軽減することを明らかにして現在、動物実験の最終段階に入っております。

また、同時期よりも忘れ外来を開設して患者さんの診療を行い、蓄積された検体をもとにした研究から、A.D.患者さんの髄液はそうでない人に比べてAβ沈着がおこりやすい環境にあることを明らかにしました。

臨床の教室での研究は、外来や病棟で呼ばれると研究を中断せざるを得ないので、掛けそうになることもありましたが、何より最も苦しんでいるのは患者さんであり、実際の患者さんと接して何とかお役に立ちたいという気持ちで僕を動かしてくれました。

今後は、今までの研究を発展させると同時にA.D.と同じく異常なβアミロイド様蛋白質の蓄積がみられるパーキンソン病など他の神経変性疾患にも目を向けてがんばっていきたいと考えております。

学術研究 (凝縮系物理学)

この度は、私が生まれ育った富山を代表する「とやま賞」を頂き、たいへんうれしく、また、誇りに思っております。私の現在研究しているテーマは、高温超伝導体です。超伝導とは、物質を冷や



独立行政法人産業技術総合研究所
主任研究員
永崎 洋 氏

していったときに、その電気抵抗が消失する現象のことです。超伝導体は電気抵抗がありませんから、電力を消費すること無く送電することができたり、超伝導線に大電流を流し、強力な電磁石を作ることができたりします。実際、現在開発中のリニアモーターカーには超伝導磁石が利用されています。

ただ、通常の超伝導体では、超伝導が現れるのはたいへん低い温度に限られています。具体的には、絶対零度、摂氏マインス二七三度付近まで冷やさないと超伝導は出現しません。そのため、超伝導を利用するには、大がかりな冷却装置が必要となり、実際の応用例はたいへん限られていました。

ところが、一九八七年に、スイスのIBM研究所のペドノルツ、ミューラーという研究者が、絶対温度一〇〇度付近(摂氏マイナス二〇〇度付近)で超伝導を示す、高温超伝導体と呼ばれる物質を発見しました。絶対温度一〇〇度は、決して低い温度ではありません。たとえば、空気中に約八〇%含まれている酸素を固めてやると液体になりますが、その液体酸素の沸点は七八度です。空気を押し固めて、液体酸素を作り、その中に高温超伝導体をいれてやれば、電気抵抗が全くない状態を簡単に作り出すことができます。ようになったわけですね。

高温超伝導の発見は、今までの物理学の概念を覆すものでした。つまり、それまでの物理学の常識では、超伝導は絶対零度付近でしか起こらない現象であり、

の受賞者

今年度

絶対温度〇〇度を超える高温で超伝導が起こるといふのは、それまで倍々としてきた物理学的なことで間違っていたことを意味するわけです。その意味で、私たち研究者は、高温超伝導の発見を機会に、今までの物理学の教科書を書き直す、あるいは、我々の理解のプロトタイプを広げる途上にあると言っていると思います。これらの研究は、我々の科学や自然に対する知識を広げるとともに、リニアモーターカーの開発といった我々の生活に直結する応用面での進歩も同時に生み出していくことが期待されます。超伝導の謎が解けるまで、後しばらくの努力が必要だと思いますが、今回の受賞は我々研究者に対するエールと受け止め、ますますの努力を重ねていきたいと考えております。

発明発見（高機能性アルミニウム材料の開発）



富山大学
工学部助教授
松田 健二 氏

この度は栄えある「とやま賞」を御授けいただきました誠にありがとうございます。私の専門は材料組織工学、特に金属材料

料で、主に扱っていますのはアルミサッシの材料です。金属の中には結晶があり、さらにその中にいろいろなものが詰まっています。これらを材料の中の「組織」といいますが、組織は、材料の強さや脆さ、電気的性質やその他の性質を変化させます。それをうまくコントロールすることで、曲げたり、切ったり、強くしたりして一般の製品として出回ります。材料の組織を調べるには、材料を切り出し、磨いて、電子顕微鏡で見るといい、非常に手間と時間のかかる作業になります。電子顕微鏡では、一ミリのメートルの千分の一の部分しか見ることができませんから、材料全体を調べるには、天文学的な数のサンプルが必要になります。特に私の研究は、高分解能透過型電子顕微鏡という原子が見える能力のある顕微鏡での仕事です。

試料の厚さは〇・一ミクロン以下のものを使い、朝から晩まで、真つ暗な実験室で観察をします。ところが、私の研究室です金属材料関係の学会では、本場に材料の組織を研究される研究者が減りました。特に「普通のアルミ」のように、一般によく知られている材料は、研究対象としてお金が儲からないこともあり、試行錯誤的な研究をする方が少なくなっています。

産官学ともに知的財産の管理が叫ばれる中、製造技術はほとんど金銀の安い海外に移転しています。そんな中「富山のアルミ」として、十年後、あるいは十数年後に一体何が残るのでしょうか。先人が築いた「富山のアルミ産業」という遺産が形骸化していく中、アルミを扱う者としてどうすればよいのかと、若輩者ではありますがいとも考えています。私の結論としては、「たかがアルミサッシの材料ですが、真剣に研究しよう」ということです。私のような若輩の研究者でさえ、アルミサッシの材料の中に、毎

年新しい化合物を最低一つ見つけています。つまり、アルミサッシの材料でさえ、まだよくわかっていないのです。そういう素性のわからない材料を日々使用していることになりました。材料にまつわるいろいろな事故が毎年起こりますが、予測できなかったのではなく、手を汚して材料の本質をとことん掘り下げた上で、予測しようという努力をしないと私は感じていました。

私が研究しているアルミサッシの材料でさえ、温度が〇〇度違っても、成分が〇・一%変化しても、サッシを強くする要因は変わります。この材料は今、自動車の車体用の材料として使用され始めています。生産技術の拠点を海外に移転している今、「富山のアルミ産業」の知的財産として残ろうるのは、材料組織にまつわる強化、成形、熱処理に関するメカニズムしかないと思っています。お金になる新規事業も大切ですが、現在の基盤技術をおろそかにしてはいけません。ましてや材料は人間の生命、日々の生活に直接関わるものです。そして「同じアルミでも富山のアルミは違う」と世界中に言わせたいと考えています。もちろんアルミに限らず、材料組織の研究は、今後日本の知的財産、人類の英知として、不動のものになると信じております。

今回、この賞をいただけるというご通知をいただき、志も新たに「富山のアルミ」をこれまで以上に真剣に研究したいと思っています。

スポーツ（カヌー）

この度は平成十七年度「とやま賞」をいただき大変光栄に思っております。

アテネオリンピックが終わわり、もうすぐ一年がたとうとしています。アテネオリンピックに出たい！と強く意識し始めたのは、シドニーオリンピックがあった六年前。そのころ私はまだ日本のトップ



財団法人富山県体育協会
スポーツ専門員
北本 忍 氏

にもなれなくて、オリンピックをかけた選考会にも出してもらえず、悔しい思いをしたことがきっかけです。

それから四年間、練習練習の毎日、特にアテネの前年度は正月も休まずみんなで強化合宿を行いました。やり残したことはない！と自信を持って言える位練習して、体調も万全の中レースに出場して九位。世界との差を痛感させられました。でも一年前までなら世界の大会で決勝にすらいけることができなかった日本が、オリンピックという大舞台で決勝に進んだということが他の外国人チームに衝撃を与えたようです。いろんな国のコーチや監督、選手から「なぜそんなにいきなり速くなったの？すごい！」と驚かれ、そして褒められました。

でも最後に、「日本人は小さいから今のままではそこまです。もっとたくさん食べてたくさんトレーニングをして、大きくなくても一度世界に出てこい」と言われました。それで決まりました。小さくても誰にも負けないパワーとテクニックをつけるため、研究してトレーニングを積んでもう一度、さらにもっと外国人を驚かせてやりたいです。今はそのことで頭が一杯で練習が楽しくて仕方ありません。

このように競技に専念できる素晴らしい環境があるのも、富山県体育協会、カヌー協会、また、たくさんの方が応援してくださるからで、いつも感謝の気持ちで一杯です。これからも皆さんに喜んでいただけるよう精一杯がんばります。

「夢の卵」

育成事業



妙案で育つ植物の研究もしているんだ



先生の話は、聞き逃さないぞ!



カンボリサイクルプラザにて

「二酸化炭素を分解する機械」

横山 覚さん (下村小学校6年)

8月10日 (水) 入門先: (株) 島津製作所・カンボリサイクルプラザ(株)

最新鋭のリサイクル複合施設の見学の後、この施設の生ゴミ処理から発生するメタンガスを使ったCO₂の還元装置の開発現場も見せていただき、いろいろ工夫された研究に驚いた様子でした。

8月11日 (木) 入門先: 京都大学大学院工学研究科

村上教授から、CO₂をCとO₂に分離するには、かなりのエネルギーを必要とすること、跡見助教授からは、超好熱菌を使って、生物学的にCO₂を有機炭素に変える研究について教えてもらいました。

8月12日 (金) 入門先: (財) 地球環境産業技術研究機構

自然環境に優しいCO₂の分解回収や貯蔵方法、バイオテクノロジーによるCO₂を一度に多く吸収できる植物による森林創生など、日本全国で取り組まれている地球温暖化防止に関する研究を学びました。

【体験記から】

高い温度でCO₂は壊れるけれども、そのために多くのCO₂が出てしまうことを教えてもらいました。3日間、どこへ行ってもCO₂を分解するのは難しいと言われましたが、エネルギーをあまり使わないで分解する方法を考えたいです。

「新聞記者」

松田 靖子さん (倉垣小学校6年)

入門先: (株) 北日本新聞社・(社) 共同通信社

8月16日 (火) 北日本新聞社 本社

朝日社会部部長デスクから、記者や取材方法等について説明を受けた後、社内を見学しました。「記者として大切なことは？」などの質問にも丁寧に答えてくださいました。

8月17日 (水) 北日本新聞社 東京支社他

関口記者と参議院本会議場を見学後、横井営業部長、稲垣記者といっしょに映画「男たちの大和」クラックアップ記者会見に参加しました。ここでの記者体験は、一生の思い出になりました。

8月18日 (水) 共同通信社

能力開発センター増田次長から、通信社の役割等について説明を受けた後、社内を見学しました。世界のニュースが最初に集まる新聞社、その現場を見せてもらったことに、とても感動した様でした。

【体験記から】

「ニュースは一度見たら終わりだけど、新聞記事は100年残る」と言われたことが忘れられません。3日間の貴重な体験で、新聞記者になりたいという気持ちがいっそう強くなりました。



北日本新聞本社にて



世界中からニュースが集まってくるんだ





うわっ、重い!



報道局の皆さんにごあいさつ

「カメラマン」

岡部 真衣さん (新湊南部中学校1年)

入門先: (株) テレビ朝日報道局映像専任高次長 平間 節氏

8月22日 (月) 専門学校東京ビジュアルアーツ

体験入学で、「番組スタッフ体験講座」に参加。バラエティ番組の収録を体験し、番組制作の楽しさや緊張感を実感したようです。

8月23日 (火) テレビ朝日・東邦航空 (株) 他

10kg近い重さの取材用カメラや、取材用ヘリコプターのカメラの操作を体験し、ニュースの取材・編集、本番のスタジオと副調整室の様子を見学しました。平間氏から伺った、海外取材や新潟県中越地震の時の体験談が強く心に残った様子でした。

8月24日 (水) テレビ朝日

富山県出身の松井アナウンサーの案内で、「スーパーモーニング」の本番を見学。秒単位での進行、CMやVTR中のセットの入れ替え等の裏方の動きを見ることができました。

【体験記から】

キャスターのように目立つ仕事ではないけれど、いろんな所に行き、頑張っているのはカメラマンなのです。平間さんのお話やテレビ朝日での体験から多くを学びました。私の夢は、この3日間で、もっと強く実現させたい夢になりました。

「カウンセラー」

長江 麻里さん (奥田中学校2年)

入門先: 聖徳大学助教授 鈴木 由美氏

8月21日 (日) 聖徳大学

大学を見学した後、心理テストを体験。大学院生との触れ合いや、先生から研究中の論理療法等を紹介してもらい、カウンセラーとしての喜びや苦勞を伺い、「将来は絶対カウンセラーになる。」と気持ちを固めたようです。

8月22日 (月) 茨城県高等学校教育相談部夏季研修会他

先生の講演を聞いた後、ゲームに参加し、不安や緊張の解き方や褒められた時の喜び等を体験。カウンセラー役も経験した後、里和内科クリニック (診療内科) を見学しました。

8月23日 (火) 千葉市教育センター

相談部カウンセリング施設を見学後、「箱庭療法」を体験。約30分間、黙々と箱庭づくり挑戦しました。箱庭を作ることで、心の深層や心の変りゆく様子が分かるそうです。

【体験記から】

カウンセラーという仕事は、多くの人と関わっていくということが分かりました。絶対カウンセラーになると気持ちが固まりました。夢を叶えることは大変ですが、信じ続ければ実現すると思います。短期入門で、こんな気持ちも見つけることができました。



「関女のプレゼント」というゲームで、正解者にはレイを運星



とっても優しい鈴木先生と

この事業は、「夢(夢の卵)」に向かって努力し、世界の発展に貢献できる子どもの育成を目指して、子どもたちが抱いている将来の夢を後押しし、自分の将来を考えるきっかけづくりをねらいとしています。

県内の小学校五、六年生から中学校一、二年生を対象に、六月上旬から下旬にかけて将来の夢を書いた作文を募集し、その中から、有識者からなる八名の選考委員会で、国内の第一人者に二泊三日の短期入門をする四名の児童・生徒を選びました。

〔小学生の部二名 (応募数七〇二件)〕
〔中学生の部二名 (応募数二二八件)〕

表彰式

「夢の卵」表彰式



【7月26日 (火) 富山県教育記念館】
八木選考委員長 (富山県ひとづくり財団副理事長) から、賞状と記念のトロフィーが贈られました。ちょっと緊張気味かな…?

この事業名は、ノーベル物理学賞受賞者、小柴昌俊さんの「子どもたちには、夢の卵」を持ち続けてほしい」というメッセージにちなんで名づけられました。

きらめき 未来塾

ディベート道場

議論を通して、多面的なものの見方や考え方、表現力を育てる。

講師：永田 円了氏（前富山国際大学教授）
湯口千鶴子氏（富山中野高校教諭）
山田 智子氏（富山大学教育学部附属中学校教諭）
「反駁」や「反対尋問」のしかた、資料の活用のしかたなどを学び、最後のディベート大会では「英語教育を小学1年生から義務づけるべきである。是か非か」の論題で積極的な議論を展開しました。



お笑い道場

古典落語を学び、ユーモアセンス・表現力を育てる。

講師：三遊亭圓窓氏（社団法人落語協会理事）
本物の落語を味わい、扇子や手ぬぐいの使い方やしぐさ等を学びました。また、お笑い大会では、落語の個人発表、落語紙芝居の他に大喜利を取り入れ、ユーモラスな答えに会場は大きな笑いと拍手に包まれました。



子どもたちに豊かな発想力や創造力、自己表現力などを育ててもらおうと、夏休みに4つの道場を開催して今年で3年目。開講式で八木塾長（当財団副理事長）は、希望者が多かったことから「参加できなかった友達の分まで、多くのことを吸収してください」と励ましました。

右脳活用道場

直感的なイメージを詩にし、創造力・洞察力を育てる。
講師：ねじめ正一氏（詩人・直木賞作家）

詩づくりを通して、頭で思い描いたイメージを自分の言葉で表現することに挑戦しました。先生から、「各々が書き綴った詩が本当にイメージしたものになっているか。」などのアドバイスを受け、思ったことを言葉に出来たときの達成感を味わいました。



思考道場

自分で考える力を磨き、思考力・発想力を育てる。

講師：秋山 仁氏（東海大学教育開発研究所次長）
目澤 恵子氏（入善町立桃李小学校教諭）
竹内 一氏（富山市立鶴坂小学校教諭）
林寺優貴子氏（立山町立高野小学校教諭）
串田 尚子氏（高岡市立野村小学校教諭）
鈴木 和代氏（南砺市立福野小学校教諭）

「すごろくドボンゲーム」や「デシリットルマスの謎」、「三面コースター」、「荷物詰め込み」、「閉じ込めちゃうぞ！」など、秋山仁先生開発の教材や身の回りにある素材を使いながら、算数の楽しさにふれました。



仕事場拝見事業 8月25日(木)～26日(金)

～最先端の科学技術を見る・聞く・体験する～

スーパーカミオカンデ、カムランド (飛騨市)

研究員の方の説明から、スーパーカミオカンデでは超純水を、カムランドでは液体シンチレーター(油)を使って、それぞれ種類の異なるニュートリノを観測していることやそれによって両施設で使われる光電子増倍管にも違った工夫がされていること等が分かりました。今回、両施設を一緒に見学することで、一步踏み込んで、ニュートリノの性質やその観測方法を学ぶことができたようです。



防護服を着て装置上部を見学
(カムランド)



これが、光電子増倍管なんだよ
(スーパーカミオカンデ)

飛騨天文台 (高山市)

先生方や学生の皆さんの説明を聞きながら、恒星を観測する望遠鏡や、太陽を観測する3つの望遠鏡を見学しました。その後、子どもたちは、2枚の偏光板を使った万華鏡作りに挑戦しました。1枚の偏光板にセロテープを何枚も貼り、これにもう1枚の偏光板をずらし合わせていくと、色が変化する、この不思議を楽しみながら学びました。



ドームレス太陽望遠鏡の内部にて

東洋ゼンマイ(株) (黒部市)

ゼンマイは、巻くと戻ろうとする力を利用して、おもちゃ以外にも車の灰皿や公衆電話等様々な物に使われていることを学びました。子どもたちは、ゼンマイそのものやゼンマイを使った商品に実際に触れながら、電気がなくても使え、有害な物質など一切出さないこのクリーンなエネルギーに、驚きと興味を覚えたようです。



えーっ！こんなところにもゼンマイが？

「未来の天才に」と模型づくりで熱が入っていました。



富山県立大学の神谷和秀先生を講師に招いて、八月二十五日(金)に「ダ・ヴィンチ入門教室」を開催しました。今回が初めてのこの企画では、「モナ・リザ」を描いたことで有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの発想にスポットを当て、自動車や飛行機、ロボット産業など、今の科学技術の発展に大きく貢献したダ・ヴィンチの思考に迫りました。入門教室では、レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿を基に復元したダ・ヴィンチの模型づくりをビデオ視聴した後、実際に簡単な橋の模型づくりに挑戦しました。子どもたちは、神谷先生からカッターの使い方や材をうまく組み合わせるコツなどを教えてもらいながら、思い思いの作品に仕上げました。ダ・ヴィンチは、この発想で飛行機の模型を考えたとされ、「未来の天才に」と模型づくりで熱が入っていました。

「ダ・ヴィンチ入門教室」開催



富山県立大学の神谷和秀先生を講師に招いて、八月二十五日(金)に「ダ・ヴィンチ入門教室」を開催しました。



株式会社インテック
代表取締役 執行役員社長
宮地 秀明氏

わが社においても人材は最も重要な経営資源です。社員一人ひとりの力の総和が事業の成否を決定し、経営の質を左右します。企業の競争力もつまるところ人材力です。

わが社の人づくりの目指すところは、一つは「全社員スペシャリスト」を志向すること、もう一つは「次世代リーダー人材」の育成です。どの組織にもリーダーが必要で、リーダーになれる人材、リーダーになりたい人材、それが次世代リーダーです。仕事の現場にはたいい抜き出でてよくできるやつがいます。磁気を発してみんなを引きつけるやつ、職場のみんなを引っ張っていつてしまうやつ、このような人材がいるかどうかが組織の力を決定づけます。次世代リーダーがいる組織とそうでない組織では活力に大きな差がついてしまうのです。

社員の能力は、現場での仕事を通じてこそ最も効果的に獲得できるものです。もちろん集団研修やe-ラーニングなどによっても社員の能力、スキルは確実に向上し、「全社員がスペシャリストに」には著しく効果的です。しかし、リーダー

材の育成となるとそうはいきません。リーダー材の育成にセオリーはありません。あなたの職場にいるリーダー材を思い浮かべてみてください。ある時、ある仕事がかっかて何かをつかみ、それで大ブレークしてどんどん成長した、そうではないでしょうか。能力の100%をはるかに超える努力が要求されるような厳しく、チャレンジフルな仕事、これを与えられた社員はそれこそ死にもの狂いになる。苦しんで、もがいて、やり遂げるが、その苦勞を通して自分を磨き、確実に能力を伸ばす。やはり仕事場でこそ、社員の真の能力が育つのです。より挑戦的な仕事を社員に提供し、社員は其中で自分を磨く、といった会社と社員の連携体制をすべての仕事場でつくり上げなければなりません。

その鍵を握るのは職場の長である管理者です。部下の成長を何もしないで漫然と待っている管理者には人材育成を議論する資格はありません。次世代リーダーが何人もいる、活力に満ちた組織づくりは組織管理者の腕次第です。

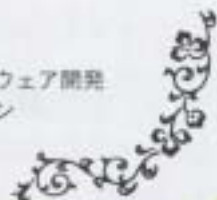
社名：株式会社インテック

住所：〒930-8577 富山市牛島新町5-5

TEL：076-444-1111

URL：http://www.intec.co.jp/

事業概要：ITコンサルティング、ソフトウェア開発
システム・インテグレーション
アウトソーシング
ネットワークサービス



我が社の人づくり



YKK株式会社
常務 黒部事業所長
鷹取 駿二氏

「企業は人なり」の如く、企業を成長させその価値を高めていくのは、社員である。YKKには、「道場の一刀流より、野戦の一刀流」と云う創業者 吉田忠雄の言葉がある。知識は必要だが、それを如何に実践で発揮するか、また発揮できるかが重要との認識である。成功や失敗、迷いを繰返しながらも、その経験を糧に高いレベルへと成長することを求める。社員は、「仕事を任せる」ことによって自らの知識や経験の不足に気付く、補完の努力をする。重要なのは、机上ではなく現場で実際の仕事を通して修得する点である。「失敗しても成功せよ」という創業者の言葉が、この考え方を支えている。失敗を責めず、大きな仕事に挑戦していく意欲に価値を認める企業風土である。

自身の経験だが、入社2～3年目の頃、YKKを代表して当時の通産省や県庁に交渉に行った。不安で一杯だったが、

当方の必死な姿勢に相手も真剣に対応してくれた。逆に、当時の先輩社員は懇切丁寧には教えてくれなかった。「なんと冷たいのか」と思ったものだが、今にして思えばそれが良かったのかも知れない。

YKKは早期から海外で事業展開をしているが、社員を派遣する際、現地語がどれだけ堪能かは大きな要素ではない。どのように仕事に立向かうのか、その意欲はどうかの方がより重要なのである。近年、経営環境は益々厳しくなり、変化も一段と速くなってきた。従来の方法だけでは限界もある。基礎知識の習得やYKK流の考え方（YKKのDNA）の研修に加え、世の中に通じる考え方や方法論なども取り入れた。しかし、どのような研修を実施しても、社員の意欲を高める環境を作り、思い切って仕事にチャレンジさせることを実践しない限り、人材育成は望まない。これが「野戦の一刀流」であり、「失敗しても、成功せよ」であろうと考えている。

社名：YKK株式会社黒部事業所

住所：〒938-8601 富山県黒部市吉田200

TEL：0765-54-8000

URL：http://www.ykk.co.jp/

事業概要：ファスニング製品

建材製品

精密機械・装置・金型



両社には、法人賛助会員として、財団に対して温かいご支援をいただいております。

平成18年度

「とやま賞」募集

1. 候補者の条件

- (1) 富山県出身又は富山県在住の方
- (2) 学術研究、発明発覚（技術開発・応用を含む）、芸術文化、スポーツ等の分野において、すぐれた業績を挙げ、かつ、将来の活躍が期待される個人又は団体

※なお、年齢は原則として45歳までとするが、人文・社会科学系についてはこの限りではない。また、大学・研究機関等にあつては助教授クラスまでとし、教授は含まない。

2. 提出書類等

- (1) 平成18年度「とやま賞」候補者推薦書（財団ホームページからダウンロード可能）
- (2) 財団が特に指定する提出資料
但し、e-mailでの提出は受け付けない。

3. 推薦締切

平成17年12月8日（木）必着

4. 送付先

〒930-0018
富山県富山市千歳町1-5-1
富山県教育記念館2F
（財）富山県ひとづくり財団 事務局あて

5. 選考、発表

- (1) 本財団で候補者の将来性、独自性、国際性などの観点から慎重に審議して、受賞者を決定する。
- (2) 受賞者の発表は平成18年4月の予定

6. 表彰

- (1) 受賞者には奨励金として100万円を贈呈する。
- (2) 贈呈式は平成18年5月の予定

●お問い合わせ先

電話：076-444-2000 F A X：076-444-2001
e-mail: masuoka@t-hito.or.jp ホームページ: <http://www.t-hito.or.jp>
詳しくは、財団事務局までお問い合わせください。

秋山仁先生の 「算数なるほど納得!ゼミナール」開催

当財団では、8月5日（金）に「なぜ? どうして? 不思議だな?」とその仕組みに好奇心を抱き、自分で試し、そして納得する「算数なるほど納得!ゼミナール」を開催しました。講師は、あの「世界一受けたい授業」にも登場した東海大学教育開発研究所次長の秋山仁先生です。秋山先生は、セミの寿命の秘密やクレジットカードの謎、ふるしきが四角形である理由、きれいなハーモニを奏でる和音など、子どもたちの日常生活のさまざまな面で密接に関連する教材を提示し、子どもたちに算数のおもしろさを伝えました。



参加した子どもたちは、「なるほど納得」と目を輝かせながら算数の魅力に思う存分ふれていました。



賛助会員の募集

富山県ひとづくり財団では、広く財団の活動に賛同される個人、法人の方々に賛助会員としてご協力をいただきたいと考えております。多くの皆様のご賛同をお願いいたします。

◆年会費

法人会員	年一口	30,000円
個人会員	年一口	3,000円

◆特典

機関誌の定期配布（年2回）
セミナー、イベント等の開催案内
各種報告等の配布
泉の情報誌、冊子等の配布

◆申込方法

賛助会員入会ご希望の方は財団へご連絡ください。所定の用紙をお送りいたします。



財団法人 富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山市千歳町1-5-1 富山県教育記念館2階
 TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001
 e-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp

平成17年10月発行